

おり供出し、ほとんど供出させられました。供出は安く、配給は高く、品物は切符制ですが、切符はあっても闇で売られて、私共には買えません。引揚げ者に配給はあってもお金がかかります。山口県では無料で、いろいろな毛布などあり、広島県ではおなべ、それもふたなしで有料一回だけ、日本は不公平でした。食べる物は不十分で、親はすこし食べ、子どもに食べさせました。食べ物十分でないため、乳は出さず、闇で米を買い、重湯を飲ませました。栄養不足で、病気がかり、医者から子どもを放ってはいけません、気をつけるよう注意されました。働かなければ食って行けず、病弱の子どもにしました。

現金収入のタバコ葉を作り、売り、その金は借金に返し、また借金生活、そのタバコも作られなくなり、収入がなくなりましたが、税金はかかって税務署がきて、税金を出すようないわれ、収入がないからといえ、食っていきただけ収入があるだろうと、仕方なく高利の金を借りてすましましたが、かえす金はなく、利子がつくし、とうとう家屋敷田畑みんな売りました。困った後に売る

ので、いわれるとおりの値で売り、金のかからないトーフ製造をして、生活しました。今では、子どもも皆一人前となり、少しずつ送金してくれます。年金もあります。トーフ製造は七十三歳でやめ、幸福に暮らしています。

消えぬ想い出

山形県 伊藤もと

隠密召集出立の日

昭和二十年五月十七日。夫三十八歳の誕生日である。そしてこの日は召集令状を受け出立の日でもあった。私は妊娠二か月、しかし戦地に行く夫に後顧の憂いなきようにと報告しなかった。真心こめた精一杯の手料理を食べ、今生の別れと覚悟しながらも、靖国神社で会いましょうと笑顔で送り出した。

終戦の日

正午に重大放送の回覧板を受け奉公班幹事（町内会長）である私は、班員を我が家に集め、思いがけない敗

戦の詔を聞く。茫然自失。

シベリヤの国境にいるらしい夫も帰るだろうと、翌日はお酒を買い漬物を漬け、夜は子供達を寝かせた後、ベランダに出て北の空を見続けた。それから毎夜……どんな格好で敵の陣地に降伏して行くのかと。

帰ってきた敗戦兵

今までの立場と逆転。威張る中国人におどおどしながら憐れな毎日のくらしで十二月になった。けれど夫は帰らない。十二月も終わりのある日、知人からの電話があった。「今帰ってきた。伊藤君も二三日中に帰りますよ。」涙滂沱。

そして帰ってきた。けれども重症の栄養失調。体中むくんでズボンも脱げない。垢どころか体中に黒い苔が生えている。

一月二十九日夜。陣痛が始まる。通行禁止中として自宅で助産婦なしの分娩。無事出産。男児であった。

俄か商人

中国人の援助で市場近くの道路に多良福餅の旗を掲げ餅屋を始めた。夜中に自宅で餛を煮、明け方道路で餅を

つく。引き揚げが始まっているがこの商売大当たり。大晦日におそなえ餅を売ったら長蛇の列の日本人客。さすが日本人と驚く。毎日買いにこられた一婦人。「もう私お金ありません。この着物を買ってください。明日引揚げです。」と。私は無料でお餅をたくさん差し上げ、「がんばりましょう。」と別れの言葉。

引揚げ

なんとか生活出来たので私達一家は最後の引揚げ船に乗る。大連港の改札で、ソ連人ら衣類等の持ち物を大量に没収される。

佐世保港に上陸、数日滞在のとき、ミルクを必要者に配給しますとのこと、そのときもらったのは二キロばかりの粉ミルク。さすがアメリカと驚くばかり。

母も娘も親であった。

引揚げ後の仮住居は十一畳の小屋に親子八人の極貧生活。金が足りない物が不足。縁故も少ない。朝三時に豆腐屋にならび、十円でおからを買ひ、配給の米にまぜておからごはんをつくり、これを食べさせ弁当を作り学校に送り出す。さてと私がお金をあけるとお釜には一粒も

残っていない毎日。夕方帰ってきたらまた食べさせねばならない。ああ今日は何とか生きた。一家心中一日延びたの思い。

米沢の実母が私の健康を心配して一升くらいの米を持ってきて「お前が食べるように。」と言う。けれど私は残らず子供にだけ食べさせた。

子供達も頑張った。

長男は山形東高校に通った。卒業を前にして大部分が大学に進まれた。長男は悩み続けた末、「僕は社会大学に進学を決めた。」と銀行に就職を希望した。

面接テストの日の前日、担任の先生から「明日は下駄でなく靴をはき国防色の作業服でなく黒の学生服を着ていくように……。」との連絡を受けた。しかし新調出来るわけではない。友人のを借りて出掛け、おかげさまで無事採用通知をいただいたのである。

あの戦争が奪った私の希望と夢

山形県 大江 徳明

満州開拓に希望を抱いたのは二十八歳の春だった。私は下駄屋の次男として生まれたがあゝ頃商売は順調だった。しかし、大東亜戦争もたけなわとなり、商品も品不足となり、問屋から思うように仕入れることが出来なくなってきた。

そんなとき、村役場で満州開拓の募集がありそれに応募した。昭和十八年四月、吉林省磐石県板楸河開拓団に入植、九月には内地へ嫁賃いに帰省、妻を連れて帰った。明けて十九年の春を迎え馴れない農作業に懸命に励んだ。妻と二人で将来の希望を抱いて頑張った。その甲斐あって秋には素晴らしい収穫を見ることが出来てとても嬉しかった。その上、可愛い子供も生まれ、十九年は最良の年であった。

それも束の間、二十年五月三日、召集令状が突然やっ